

平成 25 年度 第 2 回出水ツル分散化検討会 議事概要

日時：平成 26 年 3 月 7 日（金）14:00～16:30

場所：環境省第 2・第 3 会議室

1. 議題 1 平成 25 年度の事業報告

(1) 四国地方におけるツルの行動および環境調査結果

○今年の定着阻害事例について

- ・軽トラの事例の詳細については分からないが、通常、農家の通行に関してはカメラマン等よりも影響は少ない。(伊藤)

○過去の定着阻害要因について

- ・自然要因よりも社会要因の方が大きいと考えてよいか。昨年度、自然環境から越冬ポテンシャル解析が実施されたが、今回の飛来地も解析結果の範囲に含まれているのか。(高見)
- ・おおむね含まれている。ツルがどこに飛来するかは自然要因が関係し、その後定着するかどうかは社会的な要因が関係していると考えている。(葉山)

○保護の取り組みについて

- ・複数の地域で観察マナーの立て看板等住民を中心とした取り組みが行われているが、継続的な飛来が無ければ保護の取り組みも定着しない。また、攪乱があるとツルがいなくなってしまう、保護の取り組みが立ち消えてしまっている。初期にいかに攪乱を抑えて定着させるかが必要だと思う。(金井)

○訪ねた調査地の共通点

- ・採食地については必ずしも広大な面積が必要と言うわけではなく、狭い水田地域を利用している事例もある。課題としてはねぐらの確保が最重要。採食地については観察マナーの徹底と、狩猟に関しては例えばツルが来た年は配慮してもらおう等理解を得ることで定着につながると思う。(伊藤、金井)

(2) 平成 25 年度の九州地方環境事務所の事業報告について

○今年度業務の捕獲手法の実施、検討中止について

- ・出水市長から捕獲について地元の住民等の理解がないと実施できないと指摘を受けた。また専門的な知見を基に慎重に行う必要があり、今年度は見送った。(田中)
- ・今年開催した国際ワークショップで様々な基礎生態調査が必要という話が上がった。特に捕獲調査は重要。専門スキルが必要なのは当然だが、専門家だけでなく地元でもスキルを培い長期的に安全に実施できるよう、前向きに体制を整えていく必要がある。(金井)

○調査について

- ・給餌に依存しないツルの行動調査については過去に膨大な資料があるので、精査した上で分かっていることを調べるべき。(尾崎)
- ・基本的考え方で対策の方向性を明確にし、それを受けて様々な調査設計をする必要がある。(羽山)

2. 議題2 ナベヅル、マナヅルの新越冬地形成等に関する基本的考え方(案)について

【補足】

- ・事前に委員に確認してもらい指摘のあった部分については意見を反映して赤字で記した。
- ・表題については、出水市より分散化という言葉のイメージが悪いという指摘があったことと出水以外での越冬地形成・維持が目的となっているので、変更した。
- ・付属資料については引用文献にする予定。

(1) 背景について

○歴史的な背景について

- ・事業を進める上でこれまでの経験を踏まえることは必要。歴史的な文章を入れ付属資料として年表のようなものを付ける。(菊地、羽山)

(2) 必要性について

○農業被害等について

- ・現在は給餌によって問題が解決しているように見えるが、将来的には改善しなければならない課題なので記載すべき。(高見、尾崎、菊地、呉地)
- ・目的と必要性の内容が被る部分があるので必要性の項目は削除してもいいかもしれない。(羽山、高見)

○健全な個体群について

- ・具体的なイメージが書いてないので、どこかで明記しておくべき。給餌に依存しないというイメージは共通認識として皆もっていると思う。(金井、尾崎)

- ・具体的な健全な個体群のイメージを明記できるかが問題。あまり理想の高い目標は掲げづらい。(中島)

(3) 目標達成に向けた基本原則について

○(3)について

- ・(3)は書くべきか疑問。(尾崎)

- ・ツルに関しては個体愛護の視点を持つ人が多く、例えば鳥インフルエンザの感染実験が必要となった時に個体が犠牲になるケースが考えられるが、それに対して反対が出る可能性があるため、あえて書いた。(高見、金井)

- ・保全を進めていく上で、個体と種全体どちらか優先という書き方は違和感がある。種の保全対策を行う上で犠牲になる個体がいたとしてもウェルフェアに十分配慮するということを明記すれ

ばいいのでは。(羽山)

○(4)について

- ・新越冬地形成の基本原則であるならば、越冬地形成は出水の現状を解決するのに貢献するというような表現の方がいいのではないか。(呉地)

○(6)について

- ・表題は配慮すると書いてあるが、内容を見ると事業が滞らないように進めると書いてあり、どちらを優先したいのか分かりづらい。農水省としては、表題のとおり、農業生産に悪影響を与えないように配慮しながら新規越冬地形成を進める必要があるという内容にしていただけるとありがたい。(内藤)
- ・風評被害を無くすという意図ならば(5)に加えてもいいのではないか。(羽山)

○(9)及び(11)について

- ・内容がかぶっていると思う。(高見)
- ・(9)保全活動を実施してのフィードバックと(11)調査研究(基礎生態)は分けた方が良いと思う。基礎的な生態情報の収集は全体へのフィードバックになり、継続的に実施すべき。(金井)
- ・(9)は、これだけ具体的な対策が盛り込んであるが、まだ議論していない。順応的な管理の原則を打ち出すという程度の表現がいいのではないか。(菊地、羽山)

○(10)について

- ・目標の中に複数の越冬地形成を目指すと書いてあるので、そこに少数飛来地も対象ということが分かるような書き方にすればいいのではないか。(羽山)

○その他

- ・項目数はあまり多くない方がよい。順番は何らかの法則に従って工夫した方が読みやすい。広い視点から狭い視点、基礎的なことから応用的なこと等。(羽山、尾崎)

(4) 議事3 その他について

○働きかけについて

- ・具体的にはまだ決まっていない。(根上)

○過去の取組の整理について

- ・鹿児島県や山口県等、環境省以外で実施している取り組みについても目に見える形で整理してほしい。そうすることで重複を無くしたり、連携することができる。(金井)

○行動計画について

- ・どのくらいのスパンで考えるのか。ロードマップのようなものが必要となる。(菊地)

- ・長くても5年くらいのものが妥当ではないか。(羽山)

○検討会の名称について

・名称があまり長いのは良くない。例えばツル分散化検討会、ツル保全検討会等でもいいかもしれない。また、ツル類という表現の中にタンチョウも含めるのかどうか。(尾崎)

・これまで長年進んでこなかった原因として、分散という言葉は分けて散らすというイメージが強く、これまで長年給餌等によって手厚く保護してきた出水市民にとっては受け入れがたいという話だった。まずは分散化という言葉は使わないようにしたいと思い、新越冬地形成という言葉にした。

(中島、中村)

○その他

・順天湾の事例は学ぶことが多いと思うので、次年度業務として検討してほしい。(羽山)

・今後の検討会開催時期について3、6、9、12月は議会があるので可能な限り避けてほしい。
(楠元)

以 上